

緒 言

荻野利彦

山形大学代謝再生統御学講座運動機能再生・回復学分野(整形外科)

肩関節の前方不安定性 anterior instability, 多方向不安定症 multidirectional instability や手関節での手根骨不安定症 carpal instability という疾患名が一般的になってから随分時間が経過した。しかし、肘関節では不安定性、あるいは後外側回旋不安定性 posterolateral rotatory instability という用語がしばしば使われているが、肘不安定症あるいは肘関節不安定症という用語はそれほど耳にしないし、日本整形外科学会の用語集にもその記載がない。肘関節に不安定性を生じる疾患としては外傷による脱臼あるいは靱帯損傷がまず頭に浮かぶ。しかし、スポーツ障害や内反肘の長期観察例で肘関節の不安定性が生じることが明らかになり、O' Driscoll らにより肘関節外側回旋不安定症という概念が提唱された。同時に、急性の靱帯損傷や慢性の靱帯不全を総称して肘不安定症と呼ぶようになってきている。

肘関節外傷性脱臼に伴う肘関節内側側副靱帯損傷や、外反ストレスによる外傷性肘関節内側側副靱帯損傷については、損傷時に修復すべきか否かがしばしば問題になる。屈筋回内筋群の断裂を伴う場合は肘関節は高度の不安定性を呈することから、靱帯修復を含めた軟部組織の修復をすべきとの意見が多い。しかし、屈筋回内筋群の断裂を伴わない肘関節内側側副靱帯損傷や不全断裂を保存的に治療した場合の肘関節不安定性の残存する割合や程度は必ずしも明らかではない。

一方、肘関節外側側副靱帯損傷については、上腕骨外側上顆裂離骨折を伴うような場合には、保存療法により不安定性が残存する可能性が高いことから観血的に修復すべきであるという意見が多い。肘関節外側側副靱帯損傷では発生頻度が低いこともあり、その診断や治療についての記載は成書においては少ない。しかし、1991年にO' Driscoll らが肘関節後外側回旋不安定症を発表して以来、肘関節外側側副靱帯損傷の診断と治療について注目されている。

先にも述べたとおり近年、投球動作などのスポーツ活動による繰り返されるストレスにより生じる肘関節内側側副靱帯の弛み、あるいは内反肘変形が持続することにより生じる肘関節外側側副靱帯の弛みなど、はっきりした外傷に依らない肘関節不安定症も注目されている。スポーツ活動による肘関節内側側副靱帯の弛みに対し

ては積極的に靱帯再建を行っている報告もある。

ひるがえって、肘関節に疼痛をきたす疾患には多くのものがある。一般に肘関節痛は外側部痛と内側部痛に分けられる。外傷を契機としないで発症した外側側副靱帯損傷では肘関節外側部痛を呈する上腕骨外上顆炎、上腕骨小頭離断性骨軟骨炎などとの鑑別が必要になる。一方、同様の機序で発症した内側側副靱帯損傷では肘関節内側部痛を呈する上腕骨内側上顆炎や尺骨神経麻痺との鑑別が問題になる。とりわけ後者では、内側側副靱帯損傷、上腕骨内側上顆炎と尺骨神経麻痺が同時に合併しているような症状を呈する場合もあり、肘内側部痛の主原因を特定することは必ずしも容易ではない。本誌上シンポジウムでは、肘関節内側および外側側副靱帯に起因する肘関節不安定症の病態のよりよい理解と治療成績向上のため、第一線でご活躍中の5名の先生方にそれぞれの機能解剖と治療法についてご執筆いただいた。